

教皇庁生命アカデミー会長への教皇フランチェスコ書簡
設立 25 周年に際して（1994 年 2 月 11 日－2019 年 2 月 11 日）
「人の共同体」

Lettera al Presidente della Pontificia Accademia per la Vita
in occasione del XXV anniversario della sua istituzione
(11 febbraio 1994 - 11 febbraio 2019)
***Humana communitas* (La comunità umana)**

人の共同体は、世界創造の前から神の夢です（Cf. エフェソの信徒への手紙 1,3-14）。その共同体で神から生まれた永遠の子〔イエス・キリスト〕は、肉と血、心と感情を受けました。出生〔generazione〕の神秘のうちに、人類の大家族は自らを回復することができます。事実、人という被造物〔creature umane〕の間での同胞愛への家庭的な手ほどきは、社会政治的および人権の共同体を再編成するに当たって、真の固有の秘められた宝とみなすことができます。したがって、創造と神の愛に由来する私たち共通の血統の自覚を増す必要があります。キリスト教の信仰は、三位一体の神〔父、子、聖霊の三つの位格を持つ唯一の神〕の親密性の内にある「存在させる」と「善を欲する〔volere bene : 愛する〕」こととの永遠の一致という、言葉に表すことのできない神秘として、子の出生を告白します。このなおざりにされている啓示を新たに告げることは、今日、「生みの苦しみにうめく」（Cf. ローマの信徒への手紙 8,22）ごとく、聖霊における新たな誕生を希求している人の共同体と文化の歴史に新たな一章を開くことができます。神の一人子において、神の優しさと、敗北し放置され見捨てられ容赦なく非難されたと感じているどの人をも贖う神の意志が啓示されました。自らを私たちの一員にした、永遠の神の子の神秘は、神のこの全き受難〔passione : 熱情〕によって、一度封印されます。神の子の十字架の神秘 — 「私たちのための、そして私たちの救済のための」 — と、その復活の神秘 — 「多くの同胞の長子」としての（ローマの信徒への手紙 8,29） — は、神のこの受難が、人という被造物〔l'umana creatura〕の贖い〔redenzione〕と完成へと再び方向を転じる地点までを意味します。

私たちは、人という被造物とその世界に対する、この神の受難についての明証を再び打ち立てなければなりません。人は神によって、その「イメージ」に創造されました — 「男と女」に創られました（Cf. 創世記 1,27） — 精神的〔spirituale : 霊的〕で感受性を備えた、自覚を持つ自由な被造物として。男と女の関係は、被造物すべてが神の対話者になり神の愛の証人になる卓越した場所を構築します。私たちのこの世界〔現世〕は、私たちが生命に入る〔iniziazione alla vita : 生命への入口〕地上の住居です。この地上の住居は、私たちが運命づけられている天の住居（Cf. コリントの信徒への手紙 II 5,1） — 完全に神との、そして万物との一致を生きる住居 — を味わい楽しむことを、すでに開始することができる場所と時間です。人類家族は、その起源であり目的地でもある共同体であり、その結末は、「キリストによって、神のうちに秘められています」（Cf. コロサイの信徒への手紙 3,1-4）。私たちのこの時代に、教会は、人という被造物のための、この神の受難から溢れ出る生命のヒューマニズムを、力強く復活させるよう求められています。人という存在〔essere〕

umano)のどの生命をも理解し、促進し、保護する義務は、この神の無条件の愛から噴出します。福音の美と魅惑は、隣人愛を経済的、政治的利益の基準の応用に還元することをしないし、「一定の観念論的な選択から生ずる何らかの教義または道徳の主張」に還元することもしません（回勅『福音の喜び』39より引用）。

熱情的で実り多い歴史

1. この熱情は、神の僕の大偉大な科学者ジェローム・ルジュンの助言を受けて、ヨハネ・パウロ2世が25年前に設立した時から、教皇庁生命アカデミーの活動に生氣を与えました。ルジュンは、生物医学領域で進行していた変化の深遠さと速さを明晰に確信して、この最前線により構造化され組織化された義務を担うことが適当だと考えました。かくしてアカデミーは、「人格とその諸々の基本権の奉仕に配備される科学技術が、人の統合的善と神の救済の計画の実現に貢献することを明らかにする（Cf. 回勅『喜びと希望』35）」目的をもって、研究、教育、情報伝達のイニシアティブを発揮することができました（ヨハネ・パウロ2世、自発教令『生命の奥義』3, 1994年2月11日）。新たな飛躍をアカデミーの活動に印象づけたのが、新しい憲章の起草です（2016年10月18日）。その狙いは、これらのテーマについて、今日の文脈——科学技術革新の拍動の増加とグローバル化が、一方では文化や宗教と様々な知識との相互関連を、他方では人類家族の多種多様な様相と人類家族が居住する共通の家との相互関連を強める文脈——に、よりいっそう注目した省察を行うことです。「それゆえ、この時代の挑戦に耐える人間学的統合を秩序立てて論ずるために、技術的意味におけるかかる社会の進化の影響についての研究と検討を増強することが緊急に必要です。ですから、あなた方の有能な専門的助言の領域を、倫理的、社会的あるいは法的衝突の個別特殊状況によって提出された諸問題の解決に限定することはできません。人格の尊厳と一貫したふるまいによってもたらされるインスピレーションは、それらを総合するアプローチにおいて、生命、生命の意味、生命の価値に関する科学と技術の理論と実践に関わりを持ちます」（生命アカデミー年次大会における挨拶、2017年10月5日）。

人の墮落と「進歩」のパラドックス

2. この歴史の瞬間に、人への、人類全体への熱情は重大な困難にあります。家族関係と社会的共同生活の喜びは、深く損なわれてしまったように見えます。各人、各市民の相互不信は、自己の利益の過度の探求と、暴力もいとわない煮えたぎるような競争を糧にします。自己の安寧への執着と、共有される人間性〔umanità: 慈悲、博愛、寛容 etc.〕の幸福との隔たりが拡大しているように見えます。それは、各人と人の共同体との間には、今や真の固有の分離が進行中であると考えさせるまでのものです。回勅『ラウダート・シ』において、私は、地球および人々の歴史と私たちとの関係が陥っている非常事態に光を当てました。人類家族の一致とその未来という、重大かつ決定的な問題に釣り合う注意の欠如によって引き起こされた警報です。この感受性の侵食は、分裂と戦争という現世の力を通して、善を生み出す速度を十分上回る速度でグローバルに増えています。実質的な問題は、共同体への無関心——金の尊大をもってする、男への、女への、同盟への敵対という真の固有の文化です。否、むしろ反文化と言った方がよいでしょう。

3. この非常事態はパラドックスを暴露します。使用可能な経済的および技術的資源が、共通の家と人類家族を十分にケアしうるであろうような、まさに神の命令に栄光をもたらす、まさに世界史のこの瞬間に、まさにその経済的および技術的資源によって、一体いかにして、より攻撃的な私たちの分裂と、いっそう低劣な私たちの悪夢〔incubi：睡眠中の女を犯すという夢魔〕が到来するのでしょうか？ 人々は、たとえつねに不明瞭にはあっても、精神的な墮落 ― 私たちはそれをニヒリズムと言うことができます ― を鋭敏かつ悲痛に知覚します。それは生を、このパラドックスの言いなりになる夢魔〔succubi：睡眠中の男と情交するという夢魔〕の世界と社会に従属させるものです。この根深い居心地の悪さを、物質的快楽へと盲目に突き進むことによって麻痺させる傾向は、その精神的・霊的な質〔qualità spirituale〕の高さに目的地を見出さない生の憂鬱を生産します。私たちは認めなければなりません。私たちの時代の男女は、ヴィジョン〔理想像〕なしにつねに墮落させられ、方向性を見失わされています。私たちはすべてを自分自身でやطيعける〔自律できる〕ということとはほとんどありません。金融システムと消費のイデオロギーは、共有される〔分かち合われる〕生の美しさや共通の家の居住可能性に何ら配慮することなく、私たちの必要物を選別し、私たちの夢を操作します。

責任をもって耳を傾けること

4. キリスト教の人々は、人々の苦しみの叫びに応じて、分裂、無関心、敵意を助長するネガティブな精神に反抗しなければなりません。自分のためだけでなく、全員のためにそれをするしなければなりません。そして遅すぎないうちに、それをすぐにしなければなりません。使徒たちの ―そして希望の根拠をそこで探索するすべての客人の（Cf. ペトロの手紙Ⅰ 3,15）― 教会家族は、「神との親密な合一の、そして全人類の一致〔…〕の秘跡」（Lumen gentium,1）として、地上に種を蒔いてきました。神の被造物が再び喜ばしい希望を得ることが、私たちの〔福音の〕通知を支配する熱情にならなければなりません。年長者は彼らのよりよい「夢」をもっと信じるのが緊急に必要です；そして若者たちは、勇気をもって歴史に関わり合うよう、彼らを駆り立てることのできる「ヴィジョン」を持つことが緊急に必要です（Cf. ガラテヤの信徒への手紙 3,1）。創造と人の生命に注目する普遍的倫理の新たな眺望〔prospettiva：遠近画、透視画〕が、私たちが文化レベルで焦点を合わせなければならない目標です。私たちは何十年にもわたって追求されてきた誤った道 ― どのようなものであれ、力の意志のイデオロギーと混同された、ヒューマニズム破壊の道 ― を進み続けることはできません。私たちは、ヒューマニズムにかなった市場と技術の確信的支柱を利用する、〔ヒューマニズムに〕類似したイデオロギーに反対しなければなりません。人の生命と他の生命とを画する相違は、倫理的に〔要塞を守るために駐屯している守備隊によって〕防御される〔presidiato〕にふさわしい、すべての被造物のケアにとって貴重な、絶対的な善です。ヒューマニズムが神の愛の行為からインスピレーションを得る代わりに、それ自体矛盾に陥っていることは醜聞です。教会は新たにされた熱をもって、真っ先にこのインスピレーションの美を回復して、ヒューマニズムに参加させなければなりません。

教会にとっての困難な任務

5. 私たちはこのヒューマンイズムの地平の再開に当たって、教会内部でも困難に遭遇していることを自覚しています。したがって第一に、自らに真摯に問いかけましょう。教会の共同体は、今日、一つのヴィジョンをもって、今の時代のこの非常事態の傍らで証拠を与えていますか？ 彼らの子どもたちが地球に住むために、神の愛を伝える熱情と喜びに真摯に集中していますか？あるいは率直に、私たちは求心性の視力を失っていないでしょうか。一自身とその善に閉じられた、世俗的都市国家の統治に対する私たちの精神的覇権の野心を優先して、貧しい人々と見放された人々に対する福音的歓待に開かれた、地域の共同体の世話を後回しにしながら。

普遍的同胞愛の建設

6. 各人と各民族の同胞的・連帯的ヒューマンイズムの新たなヴィジョンを再提出するときです。私たちはこの同盟〔alleanza〕に必要な信頼と愛が、世界の創造の前から神のうちに秘められていたイエス・キリストにおける歴史の救済の神秘から、その勢いを引き出すことを承知しています（Cf. エフェソの信徒への手紙 1,7-10; 3,9-11; コリントの信徒への手紙 1,3-14）。人という被造物の良心と情愛は、信仰を、また神の王国の福音によって種子を蒔かれたこの普遍的同胞愛のわざを、全く浸透しえないものでも感知しえないものでもありません。私たちはそれを再び前景に戻さなければなりません。と言うのも、ある人はともに生きるよう強制されていると感じますが、別の人はともに探求し耕さなければならない共同の生の種子の豊かさと美を評価するからです。ある人は決して終わることのない敵対者との闘争のように生を甘んじて受容しますが、別の人は父なる神の生命力のしるしと、すでに今生かされている愛する人全員を贖う共通の目的地の約束として、人類家族を承認します。

7. 教会のすべての道は人に通じる ―聖ヨハネ・パウロ 2 世が就任最初の回勅で荘厳に宣言したとおりです（『人間の贖い主』、1979 年）。彼の前にも聖パウロ 6 世が、彼もまた計画に関する回勅〔Enciclica programmatica〕において、そして公会議の教えに従って、次のように想起しました。教会の家庭的親密さは同心円状に各人に広がる ―信仰や神の賛美になじめないと思っている人にまで（Cf. 回勅 Ecclesiam suam, 1964）。教会は、この世界に生きる、人という存在すべてに神から宛てられている祝福と慈愛のしるしを迎え入れ、保管します。

希望のしるしを明確に認める

8. このミッションにおける、激励の、今の時代における神の働きのしるしがあります。そのしるしは、地平線がネガティブな側面によって曇らされるのを避けることによって、はっきり認められます。この視覚において、聖ヨハネ・パウロ 2 世は、人の生命を歓迎し保護する行為、戦争や死刑に反対する感受性の普及、生活の質とエコロジーへの注目が増していることを書き留めました。彼はまた希望のしるしのうち、「人の生命に関わる倫理問

題 ―根本的なものも含めて― に関する信徒とそれ以外の者との間の、また様々な宗教の信徒間の省察と対話」としての生命倫理の普及を指摘しました（回勅『生命の福音』27）。生命アカデミーの学術共同体は、その歴史の25年間で、高度で有能な固有の貢献を提供しつつ、まさにこの展望に内接していることを示しました。そのしるしは次のようなものです。その展開の全軌跡における人の生命の促進と保護のための義務、生命の霊に背き、死の反文化に私たちを突き落とす中絶と病者の抹殺を最大の悪として知らせること。この方針上で確実に継続する必要があります ―信仰の成熟のために、あなたのより深い理解のために、そして今日の人々によりふさわしいコミュニケーションのために、現代の状況が提出する他の課題に注目しつつ。

アカデミーの未来

9. 第一に、言葉と、私たちの時代の男女の歴史とを生きなければなりません。―ヴァティカン公会議が私たちに権威をもって示したように、具体的な経験の中に福音の知らせを挿入することによって。人の生命の意味を把握するのは、それに関わる経験であり、出生の力学〔dinamica〕のうちに悟ることのできる経験です。かくして人は生命を単に生物学的な概念に、あるいは諸々の関係や歴史から抽象された一般概念に還元することを回避するようになるでしょう。肉への元々の帰属は、自らが自分自身の起源であるという主体〔soggetto〕の要求を退けつつ〔scongiurando：悪魔払いしつつ〕、後に続く一切の自覚や省察に先行し、またそれを可能にします。私たちが生きていることを自覚できるようになるのは、もっぱら、我々の一切の意図や決定より前に、私たちがすでに受け入れられたからにほかなりません。生きることは必然的に、迎えられ、ケアされる子どもであることを意味します ―たとえそれが、時々不適当な仕方であっても。「したがって、生命の初めから受けた、またその発展の全軌跡において生命が湧き出ることを可能にしたケアと、責任をもって他者に与えるべきケアとの間に橋を架けることが理にかなっているように思われます。〔・・・〕この貴重なつながりが、人の、そして神学の尊厳の要塞にあります。それ〔尊厳〕は、たとえ健康、社会的役割、また自己の身体に対するコントロールを失っても、生きることをやめません（緩和ケア会議における枢機卿國務長官の書簡、2018年2月28日）。

10. 私たちは、人の生命の基本的な尊重の敷居〔境界、出発点〕が、今日、他者のふるまいによってだけでなく、選択と構造的な態勢の影響によっても乱暴な仕方で侵害されていることを認識しています。利益団体組織と技術発展の拍動は、生物学的研究、教育方針、必需品の選択、つながりの人道的な質を条件付ける、未公表の可能性を提出しています。私たちに共通の人間性のケアのために、また人格の尊厳のために、経済発展と科学の進歩を男女の同盟の方向へと向かわせる可能性は、被造物への愛から確実に引き出されます。信仰は私たちがそれ〔被造物への愛〕を深め、光を当てることを手助けします。グローバル・バイオエシックスの展望は、その広い視野によって、また生命と健康に対する環境のインパクトへの注目によって、福音と被造物の新たな同盟を深めるための著しい好機を構築します。

11. 唯一のヒト属から成る共同社会はグローバルなアプローチを課し、私たち全員に、今日の世界で

まず緊密に接触する様々な文化と社会との間で対話をする要求に向き合うことを求めます。生命アカデミーは、全員の善に奉仕するための、この検討と対話に取り組む果敢な場所になることができます。恐れずに、文化間、宗教間、また学術間の対話において使用する論証と言葉を周到に練り上げて下さい。もし人権についての省察に参加するなら、それは普遍的に共有しうる基準を探究する中心的な連結点になります。人権に関する論説において放棄することのできない責任の役割と、より以上に傷つけられ苦しんでいる者との連帯から出発する義務との緊密な相関関係を示す、正義の理解と実践がここには関わっています。教皇ベネディクト 16 世は、「諸々の権利が、いかにそれなくしては恣意に変容してしまう諸々の義務を前提とするかについての新たな省察を促進する」重要性を、大いに強調しました。人は今日、重い矛盾に立ち会っています。一方では、人々は公的機関によって承認され促進されるべきとの要求をもって、恣意的で贅沢な性格の推定的諸権利を取り返すことを要求しますが、他方では、人類の多くの部分について、基礎的で根本的な権利が無視され侵害されています。名誉教皇〔ベネディクト 16 世〕は、その中の「食料、飲料水、基本的組織あるいは基礎的な保健ケアの欠如」に言及しています（回勅『真理に根ざした愛』43）。

1 2. 省察の発展が生ずる他の前線は、今日、「創発と収束〔*emergenti e convergenti*〕」と定義されている新たなテクノロジーの前線です。そこには情報およびコミュニケーション技術、バイオテクノロジー、ナノテクノロジー、ロボット工学が含まれます。物理学、遺伝学、脳神経学から得た成果と、同様に、ますます強力になる機械の計算能力を活用することで、今日、生きている材料に非常に深く介入することができます。人の身体もまた、単にその機能や性能を変形しうるのみならず、その人格的および社会的レベルでの関係の様相をも変形しうるような介入を容易に被る状況にあります。かくして、まず、この新たなフロンティアを告げる画期的な〔新時代をもたらすような〕変容を理解する必要があります。—その内在的尊厳を尊重し促進する人格への奉仕へと、それをいかに方向付けるかを究明するために。発展の可能性についての複雑さと不確かさのゆえに、極めて要求の多いこの任務は、通常望まれる以上に注意深い識別〔*discernimento*〕を要求します。この識別は、次のように定義されます。「実践理性を正しく行使するに当たって、責任をもって決意するところに基づいて可能な善を見極める、固有の任務における良心の真摯な働き」（若者に献じられた司教会議最終文書、2018 年 10 月 27 日、109）。かくして研究と評価の行程は、行為における意図〔*intenzionalità*：志向性〕とその選択の基準を受け入れつつ、道徳的良心の力学を通して生じます。信徒にとっては彼の内部で、主イエスとの関係に照らして展開します。（Cf. フィリピの信徒への手紙 2,5）。

1 3. 人の現代の都市国家の中心に精巧に練り上げられた医学と経済学、科学技術と政治学は、やはりとりわけ大地の周囲から告げられる判断にさらされ続けなければなりません。実際、科学技術研究によって、人という被造物の自由な使用に委ねられた大量の法外な資源が、同胞の分かち合いの喜びと、共同事業の美 — 奉仕〔*servizio*〕はその本当の意義を、そこから現実には採掘するのですが — を翳らせる危険を冒しています。私たちは同胞愛が、現代に欠如した約束にとどまっていることを認めなければなりません。相互信頼のうちに増大する同胞愛 — 民族間や国民間におけるように、現代の全世界市民の内部でも — の普遍的な呼吸は、非常に弱められているように見えます。霊と真理において神を賛美すること、人の間に生み出

される同胞愛の強さが、キリスト教文明の新たなフロンティアです。私たちのうちに形成されつつある新たな被造物の愛と贖いがそこで閃光を放つ、身体と靈魂の生命のどの細部も、すでに進行中の一つの復活の完全なる神秘のごとくに意表をつく驚異的なものです（Cf. コロサイの信徒への手紙 3,1-2）。主が私たちにこれらの神秘を増すことを許して下さいように！ アッシジの聖フランチェスコの証明が、地上と天上のすべての被造物の同胞であることを自認する彼の能力によって、その永続的な現実のうちに私たちにインスピレーションを与えてくれますように。主は、道を照らし、あなた方の歩みを導くために、聖霊の油を満たした灯りをもって、この新たなミッションの段階に備えることを、あなた方にお許しになります。各人の、そして地に住むすべての人の生命のために、神の愛の喜ばしい知らせをもたらす者の足は何と美しいことでしょう（Cf. イザヤの預言 52,7；ローマの信徒への手紙 10,15）。

ヴァティカンにて、2019 年 1 月 6 日

*〔 〕内、および傍点は訳者による。

traduttore : Etsuko Akiba〔秋葉 悦子・訳〕